

連載
第9回

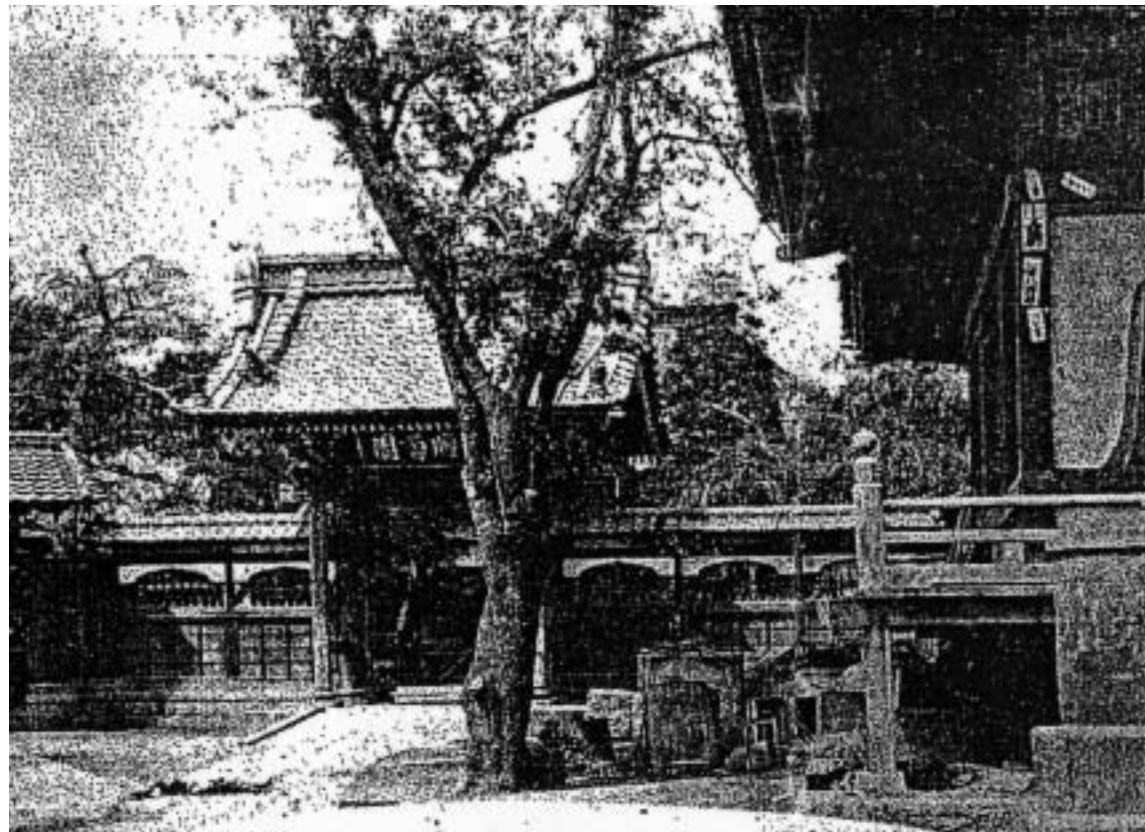
福聚山史

篠原 重一
及川 晋一
編文

祖師堂のお祖師さま

1、長生日蓮聖人像

戦災で消失した祖師堂がいつ頃建立されたのか、全くもって不明である。常円寺の祖師堂は古くは番神堂ばんしんどうと呼ばれていた。その神は三十番神といわれ、一ヶ月三十日の間、毎日当番で国家と人々を守る三十の善神のことを指し、またの名で守護神とも呼ばれていた。この三十番神信仰は、仏教においては最澄が最も早く取り入れ、その後日蓮宗においても同様に取り入れたのだとか。以来、三十番神の信仰が盛んになったため三十番神堂が建立されたという。常円寺においては、いつの日かその名称が番神堂から祖師堂となり、文政十年には、祖師像と三十番神尊が一緒に祀られていたとする記録もある。祖師像は丈一尺一寸(三十三センチ)の木座像、祖師とはもちろん日蓮聖人のことである。製作者は日持上人といわれている。日持上人は鎌倉時代後期の日蓮宗の僧侶で、六老僧と呼ばれる中の一人である。六老僧とは日蓮聖人の高弟六人をいい、日持の他、日頂・日向・日興・日朗・日昭の上人方のことである。現在、最も古いといわれる祖師像は大田



戦前の常円寺(右スミに見えるのが祖師堂)

区池上本門寺にある祖師像である。その像は等身大を上回る座像で、右手に弘子を執り、左手は挙げて経巻を握る構えであり、日蓮聖人の七回忌に弟子の日持上人らの手によって造立・安置されたという。現在は国の重要文化財に指定されている。常円寺にあった祖師像の具体的なお姿は伝えられていない。だが製作者が同じ日持上人ならば、池上の祖師像を小ぶりにした像であったと考えられもする。しかし、その祖師像も今はない。その後の祖師像の行方については大変興味深いことである。

私は何か手掛かりがなからうかと諸文献を

捜した。江戸時代の地理の沿革・風俗の変遷・巷談異聞等を年表体に編纂した『武江年表』より、次なる一文を捜すことができた。

安政三丙辰年三月十五日より五十日の間、成子常円寺長生日蓮上人像開帳

(六老僧日持作)

日本近世史上未曾有の大動乱の幕が切つて落とされた幕末時。安政元(一八五四)年にはペリーが横浜に再来航、続く安政二年十月二日には江戸を震撼させた大地震が襲ったその直後である。江戸時代には寺院の開帳が頻繁に行われている。一体何のためか。地震直後五ヶ月に満たない時期の開帳は、市民に安心を与える目的なのか、はたまた、お祭り騒ぎをして景気を煽り経済効果を上げようとする意味だったのか? いずれにしろ、仏様も大変なお役目であったようだ。

その後の祖師像の消息は分からない。あえて言うなら、混乱期にお寺に何らかの深い事情があつて手放したのか、または盗難にあつたのか? 仏像の盗難は遠く平安・鎌倉時代からあつたというが、明治初期の排仏毀釈は相当多くの寺社で破壊が荒れ狂い、盗難も無数にあつたという。

さて、『武江年表』によって江戸時代中に常円寺祖師堂に祀られていた祖師像の名称が「長生日蓮聖人像」ということは判ったが、その行方はいかに? 今となっては甚だ謎となっている。(つづく)